

NPO法人

第41号 春

芦安ファンクラブ通信

特定非営利活動法人芦安ファンクラブ

事務局 南アルプス市芦安芦倉1589-8 大滝要造

TEL 055-288-2531 FAX 055-288-2533

URL=<http://catv.nus.ne.jp/~afc3193/>E-mail=afc3193@nus.ne.jp

「第一回新緑・やまぶき祭開催のあれこれ」
実行委事務局 NPO.AFC
清水准一

芦安地域の春の祭が復活した。「新緑・やまぶき祭」が五月十五日(日)午前九時三十分から、こいのぼりが泳ぐ御勅使川沿いの芦安小学校校庭で行われた。東北大地震の関係で南アルプス市の様々なイベントが中止を余儀なくされている中で、当実行委員会は「芦安で今できること」をスローガンに祭の実施を決定した。合併以来、秋の紅葉祭だけが行われていたが、関係者の努力により、夏のシーズン前の実施が可能になった。

祭は地域の特色を生かした手作り感あふれる内容で、夜叉神太鼓の演奏から始まり、優雅なフォークダンス、昭和時代に盛んだった芦安音頭の復活、いやされる軽音楽の演奏、やまぶきのお題での俳句大会、手打ちそば、山菜、餅つき販売、やまぶきツアーで地域の史跡をめぐるなど盛りだくさんな内様になっている。

震災の市内避難者やこいのぼりの寄付者も招待し、会場での被災者支援募金者にはやまぶきの苗を配布、周囲の山裾に植樹してもらい、芦安の山里環境整備にも協力してもらう。約二千人ほどの参加者は五月晴れの日を新緑を満喫しながら楽しんだ。

「南アルプス市唯一の山岳観光拠点である芦安地域に春のイベントが

ないのは寂しい」こんな声は以前から聞かれてはいたが、なかなか実行にはいたらなかった。その要因の一つに、関わっている地区役員の任期の問題があった。地区調査の意向は、役員任期が年度で切り替わる為に無責任に事を起こせないといった消極的な反応が大半であった。したがって、次期組長候補者を実行委員に選任し一期前倒して実行委員会の役員構成を整えた。以前盛会だった「新緑まつり」ほどの規模には到底おぼつかない、そして芦安の一番いい季節は五月中旬、GW中では観光関係者が協力できない等々の要因から五月中旬、名前も「新緑・やまぶき祭」になった。会場依頼、イベント関係者決定などの準備が進んだ三月



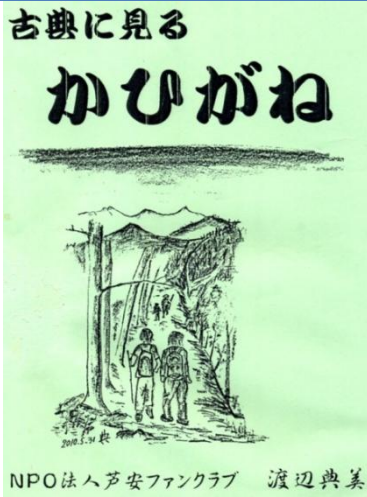
十一日、未曾有の大震災が起こってしまった。ここに記すまでも無く、大災害に日本中が震えた。祭の開催が危ぶまれ、関係者の早期の判断が求められた。三月末での実行委員会で大多数の委員が開催に賛成し、「芦安で出来ること」をテーマに開催が再度決定した。その後も早川町の「山菜まつり」の中止等で一部の役員の躊躇も見られたが、芦安の

「はたごの会」を中心に行っている南アルプス市避難者を対象にした芦安宿泊施設一泊無料招待の「東日本被災避難者支援活動」などの展開もあり、避難者を無料招待する、会場での支援募金活動などにより、「南アルプス市の気持ちを芦安で発信しよう」ということになった。

印象的だったのは、新市長の晴れやかなすがすがしい笑顔の挨拶、やまぶきの苗を一生懸命植えてくれた「芦安の将来を考える会」の人達、地域の人達みんなが踊って楽しんだ「芦安音頭」の復活、そして、司会に太鼓に踊りまです一生懸命頑張ってくれた芦安中学校の生徒達、本当にありがとう！

この祭で少し見え始めたことだが、これからも芦安は、芦安の本来のすばらしさを地域ぐるみで表現し、自らも楽しみ、訪れる人々には感動を体感していただけるような山岳観光の拠点としての地域づくりを目指していけたらいい。「地域の一番いいところの表現」これが祭りでしょうね。





続・古典にみる「かひがね」

渡辺 典美

「甲斐が嶺ははや雪白し神無月しぐれて暮れるるさやの中山」蓮生法師があり、陰暦十一月、東海道を旅して佐夜の中山の急坂にさしかかったところ、南アルプス連峰が雪に輝いて見えた情景を詠んでいるのですが、地形的に白峰三山はそこから見えませんから、作者が見たのは連峰南端の光岳、聖岳でしょう。あえて甲斐が嶺と詠んでいるところに名山としての格式を感じるので。

【三】「古今集」以降の「能因集」にも、

「甲斐が嶺にさきにけらしな足ひきの山梨岡の山梨の花」（能因法師）

と言うのが有り、旧春日居町にある山

梨岡神社付近で白い山梨の花が咲いていて、その白さが甲斐が嶺の雪の白さと同じに見えたと詠んだものです。能因法師は、「なすべきことありてまた陸奥国へ下るに、遙かに甲斐の白峰のみゆるを見て」

「甲斐が嶺に雪の降れるか白雲かはるけきほどは分きどかねつる」（能因法師）

とも詠んでいます。甲斐の白峰には雪が降っているのだろうか、それとも白雲がかかっているのか、

遠く隔たっており見分けるのができないというもので、都から陸奥国に下る街道（東山道）からは甲斐が嶺は眺められませんので想像で詠んだものでしょう。

※ 作者能因法師は、実際に足を運んでいないのに想像で情景を詠う天才と云わっています。

（四）「後拾遺和歌集」に「隆経朝臣甲斐守にて侍りける時便りにつけてつかわしける。」とあります。

隆経が紀伊式部に宛てて甲斐から送った便りの中に甲斐が嶺の雪景色を愛でていたのでしょうか、便りを貰った式部は、

「いずかたと甲斐の白峰は知らねども雪降るごとくに思ひこそやれ」

（紀伊式部）

と詠んでいます。「甲斐の白峰がどこにあるのか知らないけれども、都に雪が降るたびに甲斐の国の思いはせるといふ気持ちを詠んだものと思われます。



（五）「平安朝私家集」の中に「源重之子僧集」があり、（伝藤原行成筆針切として現存している）

源重の子の僧が晩年、熊野詣の所に雪のため滞在した宿で詠んだであろう歌として

「かひがねにつもれるゆきはみしかどもおのがうへとはおもはざりしを」

というのがあります。これは「多くの歌人がとんでいる甲斐が嶺の雪景色はまだ見たことがないが、宿に積もった雪よりもはるかに素晴らしいことでしょう。それと同様、甲斐が嶺を詠んだ歌と自らが詠んだ歌とを比較したも私の方が上手とは思っておりません」という意と言われています。

※源重の子僧は、平安の歌人で生没年・伝未詳。源重之（清和源氏）には男子が多数あり、その中の誰であるかは不明、出家した後には吉野山や熊野に詣でたことが知られていて、歌集は一条天皇の頃編纂したものと見られています。

（六）「順徳院御集」にも「かひがねは山の姿も埋もれて雪の半にかかる白雲」という歌があります。甲斐が嶺の中腹に雲がなびくと雪山が雲に埋もれる。雲が半ばかかっているの

で、かえって秀麗雄姿に見える

いのです。甲斐が嶺は高山にて早雪の降り積もる所なれば、古歌に雪山の姿が多く詠まれております。

※順徳院 第八十四代順徳天皇（十四歳で即位）で後鳥羽上皇の第二子。後鳥羽上皇の朝権回復を企図した承久の挙に加わり、敗れて佐渡に還され、幽囚二十二年、悲痛な生涯をおえた。

（七）これまでの都人の歌に比べ、西行法師は見事な叙景で読んでおられます。「甲斐名勝志」巻の二に「初鹿野山西行法師此地にてよめる歌」として「かひがねのふもと」の原はみな暮れて夕日残れる初鹿野の山」

というのがあります。西行法師が佇んでいるのは、おそらく初鹿野の里でしょう。はるか西の空には甲斐が嶺、（今の南アルプス連山）が銀色に輝いて浮かんでおり、日は既に山の端に近く、甲斐が嶺のふもとの里（御だい川扇状地）は夕日が甲斐が嶺に遮られるためすでに暮れてしまっているが、ふり返って初鹿野をはじめ笹子、御坂に連なる山々にはまだ夕日が当たっているという甲府盆地全体を絵



にした雄大な叙景を詠んだものです。

また「山屋集」の中の「君すまば甲斐の白峰のおくなりと雪ふみわけてゆかざらめや」は、あなたが住んでいるところなら、たとえ甲斐の白峰の奥だろう

と積もる雪をもらともせず、行かねばならないと、六十歳を越えてもなお衰えなかった恋心を歌ったものでしょうか。それとも胸に秘めた「永遠の恋人」鳥羽上皇中

宮待賢門院障子への思いを「甲斐の白峰」に託した歌なのでしょう。いずれにしても恋歌にまでも引用されるところに甲斐の白峰の凄さを感じさせられます。

※西行法師は元は平安末期の北面の武士で、二十三歳の時この失恋が原因で出家し諸国を旅し歌を詠んだのはよく知られています。

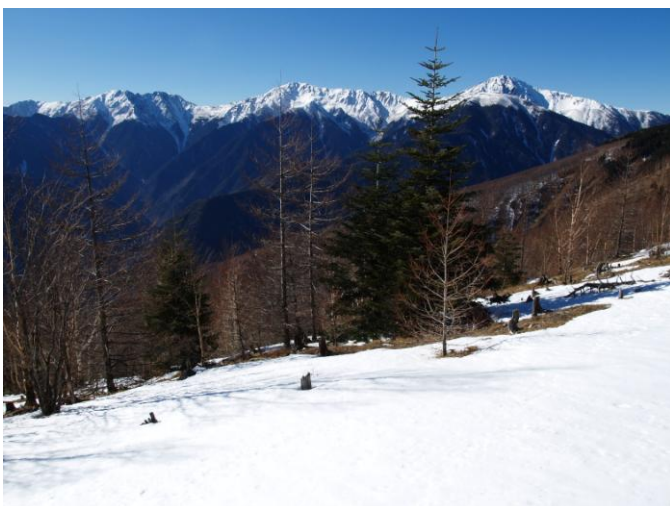
「なまよみの甲斐 古典のなかの山梨 斎藤芳弘 著」参照

（八）鎌倉時代の「海道記」（作者不明）には手越の宿を過ぎた所、この山（白峰三山）を望遠して

「惜しからぬ命なれども今日あれば生きたる甲斐の白峰を見つ」と、もの悲しさの中に白峰の御山を目のあたりにした感動と生きる

ことへの希望を詠んでおります。そしてこの歌は（覚一本「平家物語」巻第十海道下り）に借用され、名文とともに人口に するに至ったと言います。すなわち、

（・・・宇津の山辺の薦の道心細くも打ち越えて、手越しを過ぎてゆかば北に遠ざかって雪白き山あり、問えば甲斐の白峰といふ。その時三位中将（平重衡）落つる涙をおさへて、かうぞ思い続け給ふ。



「惜しからぬ命なれども今日までぞつれなき甲斐の白峰をも見つ」と詠んだという。ここで遠望できる山は、連峰南の悪沢か赤石岳だであろうけれども、作者はその時の心境を雪白き山「甲斐の白峰」に託しているのでしょうか。ここでの「甲斐の白峰」は白根山（北岳、間ノ岳、農鳥岳）のことです。

「山梨文学館記念展山梨の文学」参照

第二十六回 登山教室

隠れた名山と残雪の鳳凰山

大崖頭山・辻山・高谷山

今回の登山教室は、夜叉神峠から鳳凰山へのルート上にありながら、往々にして通過されがちな隠れた名山にスポットを当て、別の面から鳳凰山への山旅を楽しんでいただくとうと企画をいたしました。芦安ファンクラブ登山教室に付物の「雨」が、一日目には遠慮してくれたお陰で、大崖頭山や辻山へお連れすることが出来ました。特に辻山では、樹林の中を抜けていき、頂上間際になってようやく西の方面に視界が開けた時の、白根三山が思いの外大きく目の前に現れた時の歓声は、それまでの疲れが吹き飛ぶくらい嬉しいものでした。

二日目は鳳凰山念願の観音岳まで行く事が出来、そこからの地藏岳を心行くまで眺めることが出来ました。小屋に帰ってきてお昼ご飯を頂いた辺りから恒例の雨に見舞われ、夜叉神峠まで下って来た



時には霧にまで見舞われたため、最後の高谷山は断念することになりました。また、いつの日か機会がありましたらご一緒できるといいですね。登山教室にご参加くださいましてありがとうございます。そして、感想文を頂きました永盛様、ありがとうございます。皆さん、またお会いしましょうね。

参加者の感想より

永盛 綾乃

今回の登山教室、数年前悪天の鳳凰一座だったのでリベンジ、残雪を踏めて普段行かない山にも行けるということで楽しみに参加させていただきました。

天気は快晴。咲き始めの可愛らしい花を愛でながらの登り、夜叉神峠からは雪を被って美しい白根三山が輝いていました。

ここから隠れ名山。まず大崖頭山。小枝をよけながら、鹿の糞が散らばる道なき道を進みます。獣道ができているとのことでした。三角点は林の中にあり、設置時の景色に思いを馳せ：次は辻山。頂上の先に、本当にとっておきの素晴らしい眺めが広がりました。来てよかったです！南御室小屋にお世話になり、翌朝は予報通りの曇天でしたが、楽



しみにしていた砂払岳からの白砂青松の稜線を満喫し無事観音岳に辿り着きました。最後雨により高谷山は断念。

久しぶりに針葉樹の香りを嗅ぎ、鳥のさえずりが聞けて、心地の良い山行でした。スタッフの方、小屋の方、参加者の方々に感謝です。